ほとけさま

宮坂静生

叩かれてバナナはみんなほとけさま

蛇とんぼ仏間ひとつが山の家

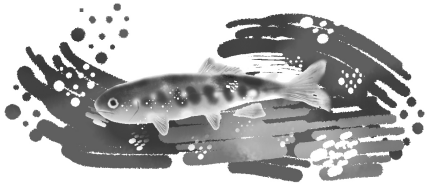
浸されし梅の実戊夜のむせび泣き

南瓜蔓龍頭鷁首競ひをる

花南瓜雌蕊は臼の据わりよき

家毀つ重機や梅雨のコロナ冷え

コロナ禍に薄翅蜉蝣よりみじめ



蜜月の蟻と蚜虫コロナ禍

二化螟虫コロナ騒ぎの隙を突き

ハマダラ蚊O型の血が好きとこそ

コーランを愛誦宵はうけら焼き

マスクメロンの深部に井筒俊彦ゐ

ラテン語も忍者ごつこも今年竹　圭佑十歳へ

トンネルに入る慟哭沖縄忌

瓜葉虫潰しサンクト・ペテルブルグへ

詩歌のちから

見直される自然 3

宮坂　静生

藤田湘子の安曇野
――「こだま」返らぬ哀しみ

〈枯山へわが大声の行つたきり　湘子〉（二〇〇三年）

一九六八（昭和四三）年、わが三一歳の夏、はじめて旧師、藤田湘子と会った。いわゆる六〇年安保騒動を体験した学生時代から八年ほどたっていた。安保を詠むことは前衛の社会的課題に挑む格好良さがあったが、安保で高揚した時代はとうに過ぎていた。型通りの社会詠はできても、気持ちが籠らない。新たな眼で自然を捉え転機をつかみたい。焦りを抱き、不安だった。

梅雨滂沱たる白馬山麓の親の原の山荘で、湘子と出会った。その頃、大町市にいた俳人、座光寺亭人が設営した数人の句会に私は誘われた。そこで、湘子の次の句を知り、私の自然を見直す作句の大きな転機になった。

〈青霧にわが眼ともして何待つや　湘子〉

雨の牧場に立つ夏霧を「青霧」とは新鮮だ。しかし、それ以上に、どうしたらいいか暗く沈んだ気持ちを詠まれる格好良さに魅了された。

顧みれば、その頃が湘子の生涯でもどん底だったのではないか。俳誌「馬酔木」の編集長として新人育成を主眼に始めた子雑誌「鷹」が、師である水原秋櫻子の忌諱に触れた。編集長を辞め「馬酔木」を去る。湘子は孤立無援の状態に陥っていた。「青霧」の句の暗さはそこにあった。

すでにその二年前から、上高地を手始めに安曇野通いが始まっていた。湘子もそれまでの「馬酔木」調の甘美な人事詠から、斬新な自然詠に転じたい思いを持っていた。

国鉄本社広報部勤務の湘子は、そのってで大町郊外の針の木山荘をベースに、蓮華岳、爺ケ岳、白馬岳の山麓、木崎、中綱、青木の仁科三湖を巡った。時に諏訪や松本へも足を延ばした。私は高校時代から一三年間所属していた「ホトトギス」系の俳誌をやめ、創刊四年目の「鷹」に早速入会し、湘子に師事した。

湘子が六八、六九年に一〇回余にわたり信州を訪れた際、作句の〝呼吸〟を知りたいと、私はぴたりと付いて学んだ。「馬酔木」高原派俳人の堀口星眠や相馬遷子らが基盤とする瀟洒な軽井沢の風光ではなく、素朴な、時に土臭い安曇野の「地貌」、その山川草木を介して自然から呼び掛けられるものをつかみたい、とのもくろみも、師らしい鋭さだと思った。

私の梓川での嘱目を湘子が添削してくれた。

〈濁りこそ川のちからや白絣　静生〉

原句の「川のいのち」を「川のちから」の方がいいと添削し、主観を具象化する手際の良さ。指導は懇篤、明快で、話術も巧みであった。

六九年一一月九日、針の木山荘での句会詠。張り詰めた会だった。

〈枯山に鳥突きあたる夢の後　湘子〉

私ははっと驚き、胸を熱くした。夢から覚めた直後のぼおっとしていた朝、突然、枯山に鳥が一羽当たる衝撃を捉えている。「青霧」の句の紗がかかった朦朧体とは違う。詠んだことのない湘子の激しい作品だと直感した。湘子も自註で「数年求めつづけてきたものが、この一句によって充たされたという思いが、やがて拡がってきた」という。四三歳の湘子の、「鳥」に象徴される実質的な青春の飛翔が終わったことを予感させた。

一〇年後には「鷹」の子雑誌「岳」を創刊するよう勧められた。湘子自ら巻頭随筆を七四回書き、私も八〇年以来一〇年間「鷹」同人会長を務めた。その蜜月もやがて終幕を迎える。二八年間在籍した「鷹」を、湘子の要請で九五年に退会した。思えば師の踏んだ轍を歩まされた気がしながらも、巡り合いの縁に私は感謝した。

湘子は剛毅な戦後を代表する俳人であった。

〈湯豆腐や死後に褒められようと思ふ　湘子〉

こんな飄逸な句も残して二〇〇五（平成一七）年、七九歳で他界した。早いもので今年で死後一五年を迎える。ところが本人が気にしたほど褒める人が現れない。なぜなのか。

世の褒貶は「愚昧」なことである。ところが師は「愚昧論ノート」（「俳句」七八年）を書き、愚昧が俳句の本質と自ら求め、世に喧伝した。本来、名誉心など愚昧なことは剛毅な者ほど求めるものではない。生きる途上に免れ難い愚昧なことである人間の欲をいかに昇華するかに、芸術家は腐心するものだ。安曇野の枯山にぶつかる鳥に象徴された志の高い句を以後、詠まれることはなかった。愚昧に拘泥する限り、冒頭に掲げた「枯山」へ放った「大声」のこだまは返って来なかったのではないか。愚昧な弟子として哀しい。

〈ゆくゆくはわが名も消えて春の暮　湘子〉

（二〇二〇年六月四日「信濃毎日新聞」より転載）